

平和旬間と主の変容と被昇天の祝日

アダム・クジャク

日本のカトリック教会で8月6日から15日まで平和旬間になります。今年、ヨセフ高見三明大司教様は「平和旬間にあたって～平和を自分たちの足元から～」という談話の中で「この10日間を平和旬間としたのは、広島と長崎の原爆記念日および終戦記念日が集中しているからです。言うまでもありませんが、平和のために祈り、平和について学び、考え、平和のために活動することは、決してこの期間に限定されることではありません。」と勧めています。平和旬間の始まりが主の変容の祝日で始まり、そして聖母の被昇天で終わります。これは偶然なことではないと思います。6日の主の変容の祝日は、変容されたイエス様は十字架の死後、どのような姿になるのか示されたのです。私たちはキリスト者として、自分の十字架を担うこととか、自分の罪深さを十字架につけることに集中されます。しかし、イエス様の十字架と自分たちの十字架を経験する前に、イエス様の栄光を見た弟子たちのように、私たちも時々目を高く上げなければなりません。私たちも勝利の内に復活され、栄光の中で変容されたイエス様を見る必要があるのです。主の変容によってイエス様は私たちの究極の目標は死ぬことではなく、永遠の命だと教えられています。私たちが存在するのは朽ちることのない愛の絆によってイエス様と共に生きることです。変容を通して、イエス様は私たちが聖霊によって高く上げられ、栄光の内にイエス様と共に生きる未来を見せてくださいました。私たちもいつかイエス様と一緒に天国に永遠に生きられるように平和の祈りで私たちと世界を変容するように務めなければなりません。15日の聖母の被昇天の祝日は無原罪の聖母が地上の生涯の終わりに身体も魂と諸共に天にあげられたということを教えられています。マリア様が神の母になったことが全世界にとって恵みであるように、マリア様の被昇天は、神の所へと昇る全人類の被昇天の始まりでもあるのです。聖母マリアは天国に入る前に苦しみを経験したにも関わらず日常生活の中で神に感謝を表わすことが出来ました。身ごもったとき、隣人たちの疑いの目を耐え忍ばねばなりませんでしたが、出産も馬小屋でした。マリア様とヨセフ様はナザレの町で裕福な夫婦ではなかったのです。ヨセフ様が亡くなった後、人生は試練続きだったことでしょう。そのような中で決して満足な生活を得ることも出来なかったでしょう。私たちも真に探し求めているものは、地上では決して見つからないものです。人間の歴史の中で彼女以上に感謝に満ちた人はいないほど、マリア様は感謝で一杯だったのです。それは、彼女を通して神が成し遂げられる不思議なみ業に対する感謝です。神のご計画に対してただ単に「はい」

と答えることによって、マリア様は全人類の救いに参与することができました。マリア様のように、神が私たちに何かすばらしいことを与えてくださった時にはそれを認め、それについて神に感謝しなければなりません。パウロが語っているように、「いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか」。神の賜物の中で最も価値ある賜物は永遠の命ですが天国に入れるように平和な世界と平和の人間関係をたてなければなりません。フランシスコ教皇様も指摘しておられます。「わたしたちは、誰一人排除することなく、互いを愛（いと）おしみ、赦し、受け入れるよう努めなければなりません。わたしたちは皆、神のいつくしみに包まれているからです。誰かを排除したり、支配したり、軽視したり、差別したりするところに平和はありません。こころとからだ、仕事と家庭生活、特に神との関係と人間関係を、より充実した幸せなものにするよう努力することによって、平和を自分たちの足元からつくることは皆ができることですし、またしなければならぬことです。それが世界平和の実現につながることを確信しつつ。」